

2. 地域一体で取組む牛ウイルス性下痢・粘膜病の清浄化対策

玖珠家畜保健衛生所・¹⁾大分家畜保健衛生所

○下田洋子・佐伯美穂・松本航平・松井英徳・病鑑 中出圭祐¹⁾

【はじめに】

管内は1市2町からなり、乳用牛農家戸数47戸(県比39.8%)、飼養頭数7,150頭(県比57.1%)と酪農が盛んな地域であり、各市町に全農家が加入する3酪農組合がある。

今年度、管内の1農場で牛ウイルス性下痢・粘膜病(BVD-MD)の持続感染牛(PI牛)を摘発。感染源は県外導入したPI牛と推察した。

管内は県外導入牛が多い(H29年度111頭)ため、地域全体の浸潤状況確認が必要と考え、3酪農組合に対する研修会及び管内全戸でバルク乳を用いたスクリーニング検査を実施し、BVD-MD清浄化の取組みを始めたのでその概要を報告する。

【発生状況】

1. PI牛の摘発：発生農場は、搾乳牛120頭規模。H30年3月末、県外に出荷した子牛2頭が牛ウイルス性下痢ウイルス(BVDV)の抗原検査陽性となり、当所に連絡。『牛ウイルス性下痢・粘膜病に関する防疫対策ガイドライン』に基づき検査を実施。5頭の育成牛をPI牛と診断し、自主的とう汰。

2. 感染源調査：PI牛5頭の母牛血清からBVDV特異遺伝子未検出。PI牛5頭の出生時期から感染時期はH29年1月から2月頃と推測。過去に採材した保存血清を用いて検査したところ1頭からBVDV特異遺伝子検出。この牛は、H28年11月に県外から初妊で導入され、H29年1月に分娩、1月末頃に搾乳牛舎に移動。PI牛5頭由来ウイルス株とこの導入牛由来ウイルス株は系統樹解析において高い相同性を示し、導入牛がPI牛であり感染源になったと推察。

【取組み】

1. 発生農場における対策：ワクチン接種と新生子牛検査を10カ月間実施中。
2. 研修会開催：管内3酪農組合員に対し、BVD-MDについて研修会を実施。
3. 全戸スクリーニング検査：家畜衛生対策事業を活用し、バルク乳を用いて実施。

【まとめ】

今回の発生事例をうけ、管内3酪農組合員に対し研修会を開催することで、問題意識を共有し、全戸スクリーニング検査につながった。今年度のスクリーニング検査では全戸陰性であり、搾乳牛においてPI牛はいないと考えられた。今後も、全戸スクリーニング検査を継続し、地域一体となってBVD-MD清浄化対策に取り組んでいく。また、現在、導入牛の検査については国の『ヨーネ病防疫対策要領』に基づきヨーネ病のみを実施している。今回の発生事例は、導入牛が感染源であったことが推察され、導入時のBVDV検査についても推進する必要があると考えている。